



TITLE:

道德統計論概説(四)

AUTHOR(S):

財部, 静治

CITATION:

財部, 静治. 道德統計論概説(四). 經濟論叢 1924, 19(4): 507-521

ISSUE DATE:

1924-10-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128213>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第九十卷 第四號

大正三十一年十月一日發行

論叢

獨占の本質……………文學博士 高田 保馬

地租の不公平可能……………法學博士 神戶 正雄

道德統計論概説……………法學博士 財部 靜治

フイアカントの社會學論……………文學博士 米田庄太郎

世界の貨幣交通……………法學士 作田 莊一

時論

營業稅廢止論を評す……………法學博士 小川郷太郎

說苑

機械と勞賃との相互關係に就てのマルクスの見解……………經濟學士 山本 勝市

丁抹の小農地設定事業……………法學博士 河田 嗣郎

雜錄

配偶の有無と死亡率……………經濟學士 岡崎 文規
爲替の安定か價格の安定か……………經濟學士 谷口 吉彦

道德統計論概説 (四)

財 部 靜 治

目 次

九、道德統計論の方法

九

今や道德統計論の方法を究めんとするに當り、先づ注意すべきは、曩に道德統計論の範圍を説ける所により推し得べきが如く、常に結果の利用方法に着眼するのみならず、その材料の收得及整理方法をも、相當に顧慮すべきことなり、先づ材料の收得につき考ふるに、道德統計の材料は複雑なるを以て、その手續上齊一の取扱ありとするを得ず、寧ろ此題目を究め盡すことは、之を各特別編の研究に委ぬるの要あり、されば茲には單に一般的注意を喚起しておくことに止めんか、就中特に注意すべきは、此範圍に於て概して視取の方法及技術につき、技業の研究に入ることありとするも、それは一次的道德統計論の際に限らるべきことなり、二次的道德統計論に關する叙説中、總括さるべき一切の材料につきては、その材料の收得及整理に關し、特別考察を見ることがなかるべし、それは當該材料を一次的に取扱ふべき、統計學の他の部門に於て、究むべき所なればな

り、唯此規則の一例外は、個別の問題に關し、又一次的道德統計の範圍に入ることなかるべき視取につき、特に道德統計上の利益に鑑み、材料蒐集を特に擴張する際に之を見る、人口統計の範圍に之が一例を求めんが、伯林の市統計が、再婚者の無配偶持續期間、離婚者の戻り縁につき、遂げたる特別調査を挙げ得べし。

一次的道德統計論の材料收得に關しては、大體に行政の文書材料を、統計的認識のために利用すること問題となるべきや、概して道德統計的研究を遂げ得べき、社會大量の本質に本づく所なり。之につきても第一次に考察さるべきは、國家行政の文書材料たり、次には自治行政の文書材料たり、第三次には公私的聯合體及協會經理の文書材料たり。

右文書材料の統計的利用は、技術上よりせんか、或は(1)確認されたる特殊の事實を、整理樣式に適ふが如く調製されたる一帳簿(假令は伊太利の刑事統計日録 *Registri criminali*)に、單純に繼續的に書寫することにより行はれ、或は(2)統計上意義ある事實を、具體的個別的性質を帶べる、統計的査察樣式に援萃し、集成することにより行はる。一次的換言すれば特に道德統計的たりとすべき査察にありても、全然複製統計に屬し、詳言すれば文書中既に確かめらるゝことを、利用することに關し、別に一般に關係ある個人に發問することなきを以て、個別票を使用するため、本來の一條件は始めより備はれりとすべし、詳言せんか個別票法の取扱は、特に全國人口實査の際に

於けるが如く、多數公衆を相手とする調査にありては、時として重大の困難を告ぐべきも、道德統計上問題たるべき、吏員及書記によりては、躊躇せずして希望するべきを以てなり、されど後に至り電氣集計機による計上を遂ぐべきこと、豫定せらるゝ際には、道德統計にありても亦文書材料集成のため、個別票を捨て、一應目錄票を選ぶことゝすべきなり、諸文明國統計事務の現況よりせんか、材料整理上舊式の劃線法によることは、道德統計にありても、今日は例外の場合に限り正當とすべし、即ち數字表極めて單純なる場合、又は特別事情の下數字表の分類夥しき際に然り、電氣計上によることは、道德統計的查察様式整理の範圍に於ても、今日尙微々たりとすべき所なるが、かゝる計上法によらざる場合、個別查察票を言下に計上用票として使用するか、或は統計的本源記事を含める、目錄票又は帳簿に本づき、計上の目的上計箋を作成することゝす。

最後に統計的に査定せるものを、常例、常理及因果態認識のために、學問的に利用すべき最終手續に關しては、學理方面に於ける統計的研究の展開につき、一般に則るべきもの、此範圍に於ても應用さるべきは自明なり、從ひて觀察せる結果の總括的表章及供覽につきても、道德統計の結果を、特に社會生活の常理立定の目的上、學問的に利用し盡すの最終問題につきても、一般統計學理上一般的に當該問題につき、説かるゝ所に據ることゝなし得べし、（社會統計論綱二六四頁以下）

及三八九頁以下參照）而も亦道德統計は人の意志及行爲に關係する所多きがために、Lexis の如きはこの點に重きを置き、論文道德統計論（前出）中特殊の解釋を與へたり、その所説は統計解析の目的上、一面の道理を精説せるものとして、一般に重んぜらるゝ所なるのみならず、數理統計への接觸にも説き及ばせるを以て、後に明かにすべきが如く、別に尙評論を挿むべきものもあるも、先づその所説を紹介することゝすべし。

道德統計上意義ある一切の事實は、人の意志により左右せられ、その意志は一の動機之に加へらるゝ際に限りて働くべく、動機の發動を見るがためには、又一の機會又は緣由を要す、されど人の内心に於て、かゝる一動機働ける際にても、之のみにては決して事實上常に、問題となれる行爲又は不作爲に、出づるの決心を見るべしとするを得ず、寧ろ可能的には反對動機のため、他の意味に於ける一決心を見ることあり、されば道德統計論の大職分とすべきは、元來道德上意義あり、又統計にとり得べき、行爲又は不作爲に出づるの機會、緣由又は誘惑を、可能的に發見すべき一特定範圍の人々中、幾何の人々が特定期間中に、事實上その行爲又は不作爲に出づるかを、明かにすることに存せん、されど實際にありてはかゝる範圍を、決して明確に限定するを得ず、寧ろ大多數の場合には、問題の行爲（不作爲につきては以下不問に付せんと欲す）に出づるの可能又は機會を、疑ひもなく有し得ざる、人々の階級を取り分くることにて、満足するの外なし、さればど

て殘餘の人々の全部は、當面の問題となせる意義により、純一性を有すべき域を、去ること遠きを通例とするや謂ふ迄もなし、寧ろそは當該行爲に出づるの蓋然數上、殆んど皆無となし得べき極微小數より、一最大小數に至る迄、幾多の等級を示すべき、諸群より組成せらる、而してかゝる諸群を研究するためには、別に尙細別のための諸特徴を借るの要あるべし、唯之につきては素より確定の規則によるべしとするを得ず、寧ろ試験的に又推測に従ひて、處置し得るのみなり。

今例を私生に借りて考察せんか、こは母の過失に關するを以て、考察さるべきものは出生者の數に非ずして、私生分娩の數にあり、然るに有夫の婦人、並に尙一定年齢限に達せざる婦人、及他の一定年齢限を越したる婦人は、何れにしても總婦人中より、取除けらるべし、而してこの兩年齢限を定むるにつきても、既にその研究上多少の專斷を挿むの要あり、されど右兩限界内に含まるゝ廣き範圍に於ても、私生分娩の蓋然數極めて區々なるものあるべきは明かなり、從ひて一般に無配偶婦人の年齢により、多くの細別を設け、かくて同一齡級別私生分娩數に、之を對比せしむるを要す、歐洲諸國にありてもこの研究目的上、必要を告ぐべき調査は、從來都市統計に於てのみ備はれり、假令は一九〇六年中伯林に於ける私生は、死産を合算して九、九〇一あり（覆産ありしたため同年分娩數より、約一步多し）之を母の年齢により分てば、十五歳以下四、十五乃至二十歳二〇

七〇、二十乃至二十五歳四五・六、二十五乃至三十歳一九・三五、三十乃至三十五歳七・六七、三十五乃至四十歳三・八八、四十乃至四十五歳一・〇四、四十五乃至五十歳一・一、その外八四は年齢不詳なりき、今是等の數をその歳の初めに於ける、相當年齢級の無配偶女數にて除せんか、當該年齢私生の統計的蓋然數として、素より全然精確とはなし兼ねども、實際の目的上足れりとすべき表明を得べし、されど又この蓋然數も依然として、混成的なるものに外ならず、その中には幾多細別の各個に、窺はるべき區々の個別蓋然數混和せらる、從ひて又更に細別研究の歩を進むるを要す、何れにしてもその目的上最も重要なもの、經濟事情及職業別による、類別研究に存するは、犯罪及自殺の統計的研究上、同様なると異らず、有福なる階級に屬し、兩親の保護下にあり、かくて經濟鬭爭の渦中に投ずるの要なき娘は、自立すべく放遣されたる少女に比し、過ちに陷ゐるの危険法外に尠きは明かなり、後者は生活難と戦ひ、自から營利に當るの要あり、之がため又は不幸なる住居事情のため、仕事仲間の男その他の男子と、絶えず接觸すべし、かゝる勞働女による營利行爲の殊異は、此點に關係する所尠し、寧ろ全生活振りに大影響を及ぼすべき職業大別により、分てば足れり、假令ば農業勞働、工場勞働（男子と共同に働くもの又は然らざるもの）手工業經營、家内工業、商店賣子、家事使用人等の別は之なり、之と共に又賃銀額の多少は、大に關係あり、勞働女の經濟事情は、職業の種類によるよりも、之により左右さるゝこと多ければなり、

普國にありては私生の母につき、その職業別の調査あり、之によるに家事使用人は、過ちの危険に曝さるゝこと最も多し、假令ば一八八九年内九〇、四二三の私生中、四九、三六四は此階級の母（産婦を含む）に屬したり、而して一八八二年の職業調査によれば、普國に於ける家事女使用人は、八五五、四二五を示せるを以て、是等の婦人に關する私生分娩の蓋然數は、一年内に於て少くとも〇・〇五なるを見る、而して各家事女使用人は、普通に多年を通じ、處らくは十年に亘りて、この危険に曝さる、假りにこの蓋然數を、特に二十乃至二十五歳の者につき算定せんか、その數は著しく高かるべし、伯林にありては私生の子六、三二七人の母中、人身的奉仕に従事せるもの二、一四六、着物製造業及洗淨業（從ひて大部分裁縫女及洗濯女として）一七二〇、商業（從ひて大部分は商店賣子として）一四五、飲食店（從ひて多くは女給仕入として）七三、藝術及學問（從ひて女優、歌ひ女、踊り子として）五三、その他の諸業三四、職業不詳の女勞働者一五九七人なりき、巴里に於ける事情も同様なりき、假令ば一八八九年巴里の養育院にて、分娩せる私生の母五、四三三中、一、七五三は家事使用人、三六〇は炊事婦、一〇一は小間使、一六四は給仕女たり、從ひて二、三七八人は家事的勤勞に服せり、その外一、一二六は諸種の裁縫女（その中には襦衣、コルセット、胴衣仕立女、裁物職等を含む）二八八の洗濯女、二七一の飾物商、組絲職人、造花職、刺繡女、編物細工女、一一六の商業手傳及賣子、五三二の日傭女なりき、その以外に於て大部分を占ぶる者も、女勞働者たり、女藝術家は

一七、女教員は二一、政府の役人(郵便局)は二、女學生は二に過ぎず、無業は五六ありき、私生の母の受くる賃銀、又は所得事情に關する統計的總括は、未來の開拓を待てる事項たり、私生の地理的分布も亦之を問ふべく、經濟事情、信教、血統、傳習的道德觀等に於ける諸相違は、種々之に隨伴す、普國にありては總出生數に對する、私生の百分比一八八一乃至八八年の平均によれば、全國として八・一たりしも、東普一〇・七 西普八・六 市區伯林一三・六 ブランデンブルグ一〇・六 ポムメルン一〇・九 ポーゼン六・九 シュレージエン一〇・七 ザクセン九・六 シュレスウイヒ・ホルスタイン九・三 ハンノーフェル六・八 ヘッセン五・七 ウェストファーレン二・八 ラインプロウインツ三・六 たりき、從ひて西部諸州にありては、私生子の出生を見ること、東部大工業に富める地方に於けるよりも、比較的に著しく少く、中にもラインランド及ウェストファーレンは、此點に就き最も良好なり、こは部分的には是等二州に、加特力教勢力あること、關係あり、全國としての私生率、新教徒たる母にありては、一〇・三%たりしに、加特力教徒たる母にありては、六・五%に過ぎざればなり、されど又右二州に於ける私生率は、新教徒にありても亦甚だ低し、そは猶太民族に於ける私生數渺きの事實と同様、經濟事情が決定的元素をなすことを、重ねて又反映するものなり。

凡て道德統計的研究上、前例その他之と同様なる一切の事例に於て、諸特徴の多數を組合はす

ことにより、可なり具體的に限定されし諸群を構成し、是等につき當該事例生起の、統計的蓋然數を算定することゝすべし、次にこの蓋然數は如何なる事情により、その最高數に引上ばされ、又是等事情の變化により、如何に益々低下するかを、觀察することゝなし得べし、要するに道德統計の研究にありては、常に同一行爲を行へる人々の數を、かゝる人々を生むべき一全體として、決定的に限定されたるものと、比較することを心掛くべし、されど實際上多くはかゝる限定を明確に遂ぐるを得ず、上に示せるが如き仕方により、かゝる比例の近眞値を、收め得るに過ぎざるべし、實際上かゝる限定を遂ぐるの材料不備なるため、かゝる比例の基礎として、全人口又は男女何れか一方の總數を、採ることに満足するの要あること多し。

上述の如き仕方により、道德上意義ある一事件に關し、一定期間即ち通常は一曆年内に於て、適當に限定されたる諸人口群中に、示さるゝ蓋然數を確かめたりとせんか、次に殘さるゝ重要問題として、究明されたる右の比例數は、時の經過に伴ひ、多少の常例を示すや、大動搖又は特定方向への永續的變化を、示すやを問ふべし、この意味により凡ての諸群を、研究するは必要ならず、割合に該括的な研究手續にて足れりとす、即ち特色ある總事情を、多年に亘りて尋ぬることゝすべし、道德統計上のあらゆる蓋然率にありては、外觀上は變化を示すこと微小に過ぎずとしても、蓋然數理上の分配例に訴へて判斷するときは、可なり安定性を缺くを見る、從ひて又是

等の經驗的比例數にありては、幾多偶然原因の影響たる、定型排列系統の擾亂を伴ふべき、數學的・恒同蓋然數を、決して窺はしむることなし、寧ろその根本に可變の諸蓋然數あり、而してその變化につき原因を明かにし得ることありとしても、それは偶然原因によりて惹起さるとなし得べし。されどその経過系列が、定期回歸的動搖を示し、又は相續ける多數項上、鮮明に窺ひ得べき昇降を示すときは、之を以て偶然的擾亂に基づくものとするを得ず、寧ろ時間的に關聯してその影響を及ぼすべき、原因によりてのみ惹起さるとすべきや當然なり、このことたる特定の一方に、進み行くべき變動にありては、一層強く説き得べき所なり。素より一統計々數の變動上、引續き遞降又は遞昇するに當り、何れの場合にも何等の疑なく之を特定の一原因に、歸し得べしとするを得ず、假令は自殺は數十年來、諾威以外の諸國に於ては、凡て増加したり、而して右増進の勢は、人口に比較せる比例數にありては、一層鮮明に窺はるゝ所なるが、之が理由釋明の目的上、吾人は一般論的に晩近生活の煩瑣、刺戟及諸困難を、増せるによると指示し得るに過ぎず、されど之がために明細なる因果關係、立證されたりとするを得ず、離婚も亦殆んど一切の國に於て、人口増加の勢に勝れる、大増加を引續き示すを見る、而して J. Bertillon, *Le divorce et la séparation de corps*, Journ. de la Soc. statistique de Paris, 1884 は離婚と自殺との間に存在する、固有の並行關係につき、注意する所ありき、即ち氏は七〇年代以後の統計資料に本づき、諸國を

自殺小率なるもの、中率なるもの、大率なるものに分ち、更に離婚率の多少により、同様等級を分てるに、二者可なりよく一致することを發見せり、即ち假令ば年平均上、人口百萬に付自殺數、及現存夫婦十萬組に付離婚又は寢食別離は左の如し。

		自殺		離婚	
		自殺	離婚	自殺	離婚
英	威	六八	六	和	蘭
					三・五
					二八
諾	威	七三	二・五	巴	丁
					一五七
					三二
伊	太	三一	一三	ウ	ル
				チ	ム
				ベル	ヒ
					一六二
					三八
瑞	典	八一	二七	錯	遜
					二九
					九
					一四五
佛	蘭	一五〇	三〇	丁	抹
					二五八
					一七四
白	耳	義	六八・五	瑞	士
					二二六
					二六二

右自殺及離婚間の平行關係は、素より右二現象間に、直接因果關係あるによるとすべきに非ず、寧ろ特殊の原因が、同時に諸種の現象に、助勢的又は阻碍的影響を、及ぼすべき場合の一例をなすに過ぎず、假令ば溺酒は自殺並に離婚の、増進を助くべきや疑を容れず。されど又他の場合にありては、二計數系列の並行的變動を察し、之が事由を一の直接因果關係に歸し得べし、特に自殺並に財産に關する犯罪にありては、經濟の消長を示すべき幾多標準との間に、かゝる關係あるを見る、必要生存資料の代價は、屢かゝる標準として採用せらるゝも、この標準は不確實な

るを、示すこと珍しからず、蓋し穀價の騰貴ありても、之と同時に事業活躍し、その結果賃銀も高きこと、あり得べきを以てなり。

以上は Lens の所説なるが、v. Mayr はその説を評し、論者は道德統計論の學問的結果評價上、その結果の意義及價值に關し、統計學の他の部門の成果、特に人口統計論の成績に比して、劣れりとするの印象を貽さしむるが如き、一見解を吐露すとなせり、そは即ち道德統計の研究上、「常に同一行爲を行へる人々の數を、かゝる人々を生むべき一全體として、決定的に限定されたるものと、比較す」ることを期すべきも、實際上多くはかゝる比例の近眞値を、收め得るに過ぎずとせる點に關す。以下その評論を骨子として説く所あらんか、右の所説に對しては、先づ特定行爲又は不作爲に出づるの、原則的可能存在すべき大量を、無條件に限定し得べきことあるは素よりなり、その以上に一定の場合には、別に尙特別の機會、緣由又は誘惑に遭遇すべき群を形成することも、全く不可能とはせざるに拘はらず、論者は之を形成するの要なしとすることを注意すべし、その外注目すべきは、道德統計論上の手入を加ふべき材料につき、右の如く個別事例を生み出すべき基本の全體として、比較的具體的に限定されたるものと、實際生起せる事例數との比例、又は Lens の所謂一次的蓋然數を明かにすることが、道德統計論の大職分たらずして、寧ろその大職分の一たることなり、その外二次的蓋然數、詳言すれば實際に遭遇されたる事

件が、特殊の一特色を有することに關する、蓋然數を明かにすることも有益たり得べきは、Lexisも之を承認す、假令は自殺の男女別は、歐米諸國に於て女一對男三乃至五の割合なるに、本邦の特色を示すべき女四對男六の蓋然數は、かゝる二次的蓋然數にして、その特色ある割合以上には、尙何事も知らしむることなし。次に一次的蓋然數と近眞的比例關係を、有するに過ぎざる比例も、算定さるゝこと稀なりとせざることも、Lexisの承認せる所なり、假令は離婚の頻繁度數は、屢々年々の離婚數と、同年内婚姻數との比により示さる、兩數の間に何等かの密接なる關係、全く存せずと雖も尙然り、こは年々結ばるゝ婚姻數を以て、素より粗大ながら同時に現存せる夫婦組數、換言すれば離婚蓋然數の固有基數に對し、比例的近眞値となし得べく、從ひて右の比例も、亦離婚蓋然數に幾分か比例的なりと、なし得べきがためなり、素よりかゝる比例は、あらゆる關係上停滯的なる一人口を假定とする際、蓋然値としての直接意義を收め得べし。その外又 Lexis は道德統計的社會大量、及比較のために引ける基本大量に、相當の分類を施すことにより、一次的蓋然數究明の途も、亦開かれ得べきことを適切に示せり、事實上道德統計論が此點に於て、人口統計論と區別さるゝ所ありとせども、そは精々人口統計論に於ける個別の問題解決のため（假令は年齡別死亡律度の研究）實際上右の分類を一層詳しき程度に及ぼすことに存す、されど又人口統計論の他の問題、假令は職業別死亡狀況の統計、一層鮮明に罹病統計につきては、具體的動

大量及之に相應すべき基本靜大量を、確認するの條件を充たし兼ねること、道德統計論に於けると毫も異らず。

その外道德統計論は、決して前記の意味に於ける、一次的蓋然數を抽出することだけに、その本分を盡さるゝことなきを注意すべし、一面一行爲につき責任ある者、又は(責任ある者と然らざる者とを、分つは不定なるを以て)一行爲を行ふことにつき客觀的に能力ある者が、如何なる相對的度合により、實際上その行爲を履行するかを示すことは、決して道德統計論の固有職分に非ると共に、他面統計學の一部門としての道德統計論の全職分は、右の任務以上に廣く及ぼさる、即ちその統計論上統計的認識の、全成果を説明すべく、而してその道德統計論に採り入るべき、諸範圍の限界内に於ける觀察及整理の手續は、之が基本をなす、特にその研究上前記比例のみならず、絶對數も亦問はれ、又諸比例につきてはその比例算出上、主觀的責任の程度を、明かにすることを目指すべきものに限られず、即ち國民の累繼又は慶福を問ふべき、他の比例も亦問はるべき資格あり、實際上非行により脅かさるゝ全人口と、犯罪行爲との關係を問ふは、刑罰責任年齡に達せる人の總數、及その諸細別群と非行者との關係比例を、尋ねると同様に正當なり。

關係比例の外類別比例も、恰も亦道德統計論の範圍に於て、重大の意義あり、かゝる比例を問ふも亦「有益」なることあるべしとし、幾分か添物的に之を認むるのみなりとせんか、之を尊重す

ること輕きに過ぐと謂ふべし、そは學問上完全に材料に通達するために、有益なるのみならず直接に必要なり、假令は犯罪への傾きの大きさは別とし、非行の主要方向別による犯罪現況、並に此點につき惹起さるゝ變化は、性、年齢特に又自殺の手段別による、自殺大量の現況同様學問上大に興味あり。

要するに道德統計論に於ても、學問上の個別問題は夥しく存す、之あるがために道德統計論の各編に於て惹起さるゝ、特殊の方法論及技術を説ける後を承け、道德統計論の學問的建設物を、完全に豊富ならしむべく、又統計學の他の部門特に人口統計論とも、完全に比肩せらるゝの觀あるを得べし。(未完)